

# 食鳥検査だより

公益財団法人 鳥取県食鳥肉衛生協会

NO.29



米久おいしい鶏の西山鶏舎全景

## 巻頭のことば

しばらく鳴りを潜めていた鳥インフルエンザが、平成26年4月13日、3年ぶりに熊本県で発生しました。平成22年12月に島根県安来市で発生しその後主に九州地方で散発しましたが、平成23年2月の宮崎県での発生を最後に続発がなく記憶が薄れかけていた中での発生でした。

そのような状況下、最近では中国大陸や韓国で継続的に発生し我が国へ飛び火するのではと懸念されておりましたが、鳥インフルエンザの権威である京都産業大学鳥インフルエンザ研究センター長（鳥取大学鳥由来人畜共通感染症疫学研究センター長）大槻先生が当協会役員研修会（特集記事を参照）で予見されたとおり、韓国と同じH5N8亜型高病原性鳥インフルエンザが熊本県で発生を見ました。大槻先生によれば、平成16年に79年振りに山口県で発生した事例も、韓国で同病が蔓延する中、隣国の我が国で発生したものであり、今回もその時の状況と極似しており警戒が必要とのことでした。まさに、悪夢が再来した感があります。幸いにも、迅速かつ適切な対応がなされ、その後の感染の拡大もなく5月8日に移動制限が解除され、終息宣言が出されました。

一方、県内での鶏を取り巻く状況ですが、家禽衛生に関しては、平成26年3月に届出伝染病で

ある鶏伝染性喉頭気管炎が発生し、感染の拡大が懸念されましたが、関係者や関係機関の対応により、現在のところ被害が地域限定的にとどまっている状況です。

また、食品衛生に関しても、同年5月に米子市の飲食店で鶏肉に由来するカンピロバクターによる集団食中毒事故が発生するなど、鶏肉消費動向に影響を与えかねない事例が発生しました。

このような状況やT P P交渉（鶏肉骨抜き関税：11.9%）の不透明感が漂う中にもかかわらず、当協会の処理羽数は、年々順調に推移し平成25年度には1,600万羽に達し全国第8位の処理羽数となりました。

更に、生産現場では増羽意欲が高く今後処理羽数が増加することも予想されますし、現在、飼養規模の拡大に向けて鶏舎が建設中であったり今後計画が立案されているものや、将来の増羽に向けて汚水処理施設の処理能力の向上が図られたりなどの事例が伺え心強いばかりです。

当協会としまして、このような生産や処理羽数の拡大基調を見据え、より一層の鶏肉の安心安全の確保を図るため、検査技術の研鑽を積み検査体制を更に強固なものとする所存であります。

# 役員合同研修会報告

平成26年3月14日 白兔会館

当協会の評議員、理事および監事に対して、京都産業大学鳥インフルエンザ研究センター長（鳥取大学鳥由来人畜共通感染症疫学研究センター長）大槻先生を講師とした鳥インフルエンザに係る研修会を開催しましたので、その内容を紹介します。

研修会は、従来、鳥には低毒性だが人に毒性が強いウイルスの存在や、医療水準の低さから、有効薬の一つであるタミフル等の投与がなされない等の適切な治療がなされず患者が死亡した例や病院内での看病した家族への感染例等のヒトに身近なテーマを主として、大槻教授が寄稿された「鶏の研究（木香書房）」の書面により以下の説明があった。

## 1) 「鶏の研究2013、10号」より

### 東大医科学研究所河岡義裕教授等の研究概要

「H7N9型ウイルスが、鳥では感染するが低毒性であるにも拘わらず、サルを始めとしたほ乳類に強い感染性を示し、サルでは肺において重度な病変が認められたことから（表1参照）、ヒトを含むほ乳類に簡単に感染する危険性の高い鳥インフルエンザウイルスであることが証明された。」

表1 鳥インフルエンザウイルス（H7N9）の各種動物への感染性、病原性

ウイルス株	フェレット	マウス	サル	ブタ	ニワトリ	ウズラ
安徽省 Anhui/1	同居感染(1/3)	致死性(++)	気管 増殖性 (++)	増殖性 気管(+) 肺(+)	増殖性 気管(+) 肺(-)	増殖性 気管(++) 肺(+)
上海 Shanghai/1		致死性(++)				
群馬(カモ) DK/GM466	同居感染(0/3)	致死性(+)	気管 増殖性 (++)	増殖性 気管(-) 肺(++)	増殖性 気管(+) 肺(-)	増殖性 気管(++) 肺(+)
カリフォルニア H1N1pdm09	同居感染(3/3)	致死性(+)				

鶏の研究〈2013〉第88巻・第10号

## 大槻教授コメント

- ・ 鶏には低毒性と認識されていた鳥インフルエンザウイルスが、ほ乳類への強い感染が見られた。
- ・ 時間を経るごとに強毒株に変化することが判明した（鳥取大学の実験室内でのウイルス継代で実証済み）。

## 2) 「鶏の研究2013、11号」より

H7N9亜型鳥インフルエンザウイルスが、今後H5N1型ウイルスと交雑し、どのような性状をもつ新しい鳥インフルエンザウイルスが出現するか心配である。家畜衛生のみならず公衆衛生面からも、これまで同様気を引き締めて、行政・生産者一体となった防疫体制の確立が重要。

## 3) 「鶏の研究2014、3号」より

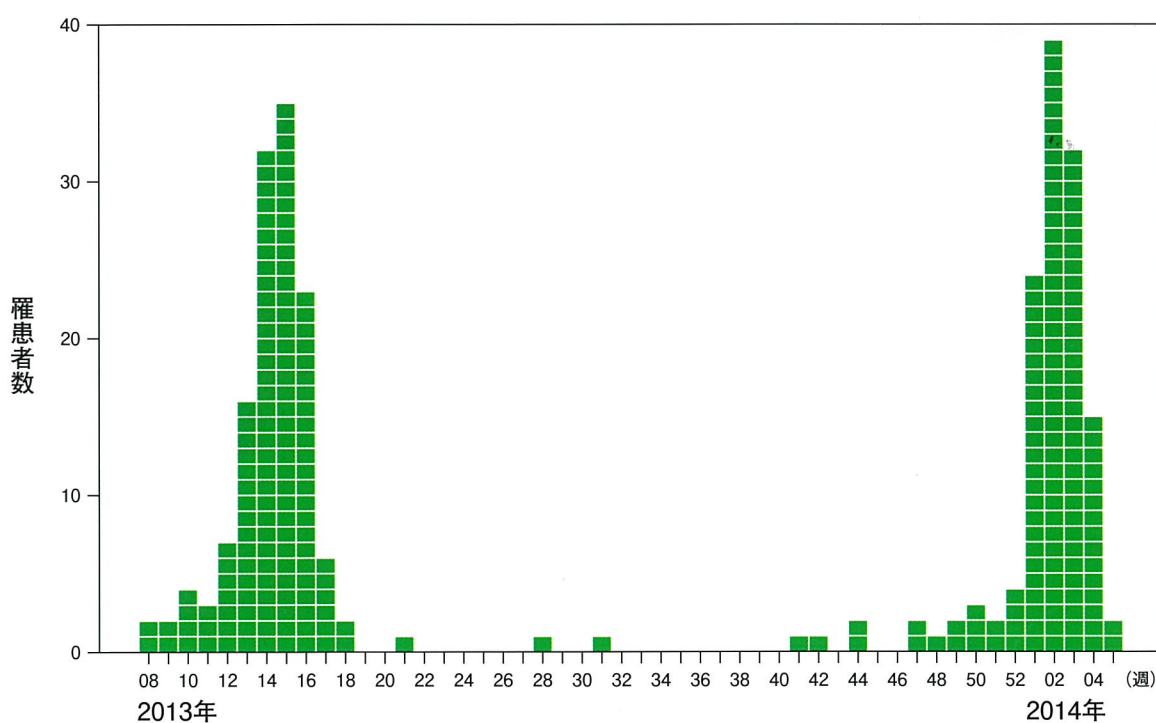
中国でのH7N9型鳥インフルエンザウイルスの感染状況としては、一時、感染が終息した感があったが2013年8月から再発生があり拡大を続けている（表2参照）。

そのため、鶏肉鶏卵の消費が低迷し、価格も下落したことから33億ドルの経済損失被害が発生している。

従来、鶏が生体で市場取引される国において、ウイルスを排出する感染鶏との濃厚接触が人への主な感染経路と考えられていた。しかしながら、中国の病院内で鳥インフルエンザ感染患者を看護した家族に感染した例から、人から人への感染が疑われることとなった。

表2 中国における鳥インフルエンザ（H7N9）罹患者発生状況

2013年2月10日～2014年1月30日まで



鶏の研究〈2014〉第89巻・第3号

#### 4) 「鶏の研究2014、4号」より

中国での、H7N9型鳥インフルエンザに関心が集まっている最中に、2014年に入り韓国では、H5N8型高病原性鳥インフルエンザの感染が、急速に全土に拡大している。法令に基づく殺処分を受けた家禽、水禽類は2014年1月末までに70農場の200万羽に及んでいる。

我が国でも2004年1月、山口県での79年ぶりの発生は、韓国と同じH5N1型ウイルスによるものであり、今回も日本への飛び火感染が懸念される。

国内での養鶏場での防疫対策の徹底、モニタリング及び検疫の強化が必要。



種鶏給餌作業



種鶏



種鶏群



種鶏(雄)

写真提供：米久おいしい鶏株式会社

# 平成25年度 食鳥検査結果

## 1. 食鳥検査羽数

3処理場合計で16,228,961羽であり、前年度より1,293,424羽の大幅な増となりました。

米久おいしい鶏株式会社、名和食鶏有限会社、株式会社大山どりにおける各処理場毎の検査羽数の概要は表1のとおりであった。

表1 処理場別検査羽数

	検査羽数	前年比
米 久	9,121,370	109.2%
名 和	653,844	110.0%
大山どり	6,453,744	107.7%
合 計	16,228,961	108.7%

## 2. 廃棄処分状況

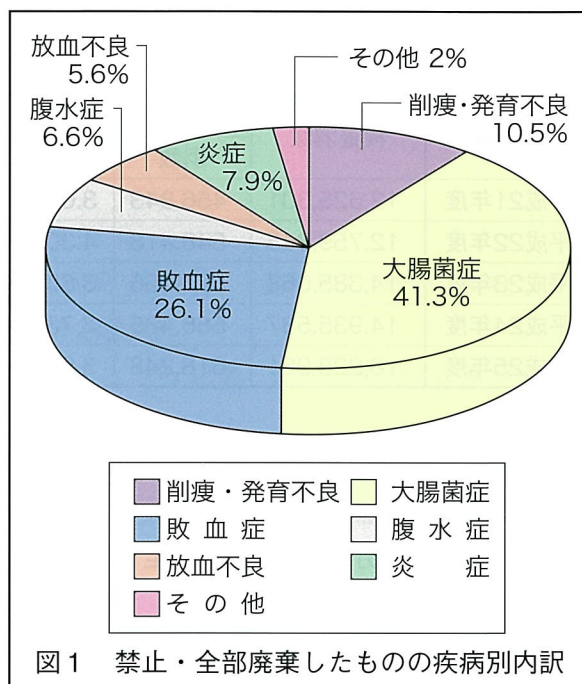
検査結果に基づく、解体禁止、全部廃棄、一部廃棄の各処分状況は表2のとおりであった。

表2 処分状況

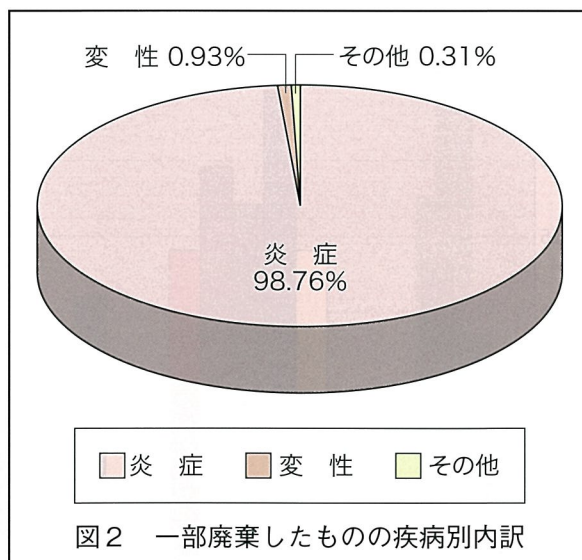
	処分羽数	検査羽数処分率
解体禁止	18,360	0.11%
全部廃棄	170,720	1.05%
一部廃棄	429,168	2.64%

解体禁止・全部廃棄の内訳は図1のとおりで、多いものから大腸菌症、敗血症、消瘦・発育不良、炎症、腹水症、放血不良、その他(出血、サルモネラ症、外傷、腫瘍、黄疸、ブドウ球菌症、マレック病)の順であった。昨年度より、炎症が大幅に増えたが、消瘦・発育不良は減少した。

全体として24年度より、と鳥禁止や全部廃棄率が減少した。飼育管理が十分に出来たことが理由と推測された。



一部廃棄の疾病別内訳は図2のとおりで、多いものから炎症、変性、その他(出血、腫瘍)の順であり、炎症が全体の98%以上を占めている。



# 最近5カ年間の検査結果(平成21年度～平成25年度)

## 1. 処理羽数

最近5カ年の処理羽数は増加傾向であり、特に、初めて1,600万羽台となった。平成22年度以降は大幅な増加で、平成25年度は、

年度別検査羽数等

(羽、%)

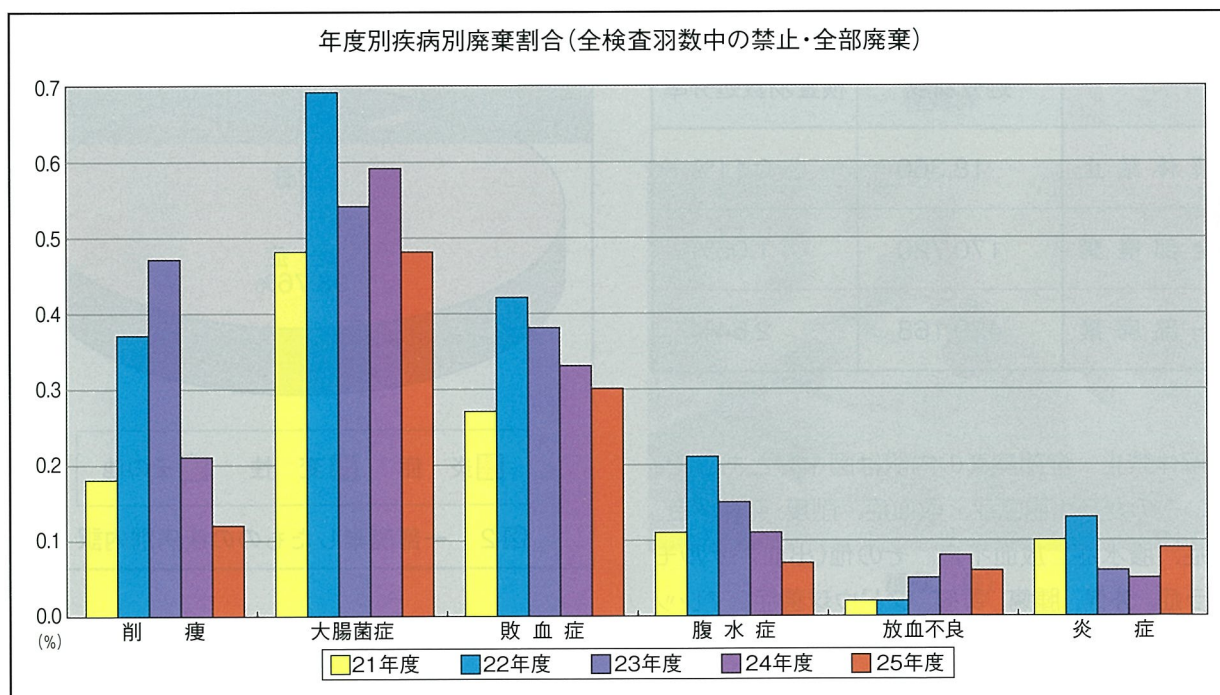
区 分	検査羽数	処分実羽数		解体禁止羽数		全部廃棄羽数		一部廃棄羽数	
		羽数	割合	羽数	割合	羽数	割合	羽数	割合
平成21年度	12,625,301	456,843	3.62	25,784	0.20	125,370	0.99	305,689	2.42
平成22年度	12,759,845	548,418	4.30	39,409	0.31	201,430	1.58	307,579	2.41
平成23年度	14,385,068	525,958	3.65	65,532	0.45	176,065	1.22	284,361	1.98
平成24年度	14,935,537	556,485	3.73	36,608	0.25	168,568	1.13	351,309	2.35
平成25年度	16,228,961	618,248	3.81	18,360	0.11	170,720	1.05	429,168	2.64

## 2. 廃棄状況

解体禁止の大部分は削瘦・発育不全で毎年度改善され、25年度は大幅に減少したが、今後、食品の安心・安全及び経営改善の見地からもより一層、飼養管理と衛生対策の徹底が必要と思われる。

次に全部廃棄を疾病別にみると3大疾病である大腸菌症、敗血症、腹水症の中で、大腸菌症による全廃棄が大部分を占め、平成25年度は全検査羽中

約0.48%と改善されてきたが、割合としては最大となった。これは、全国的な傾向のようだが、飼養管理、衛生対策の徹底によって防げるとされており、今後一層の改善努力が必要と思われる。敗血症、腹水症も減少傾向で推移している。また、マレック病はワクチンの接種の普及でほとんど発生しなくなっている。



# 平成25年度 事業活動の概要

## 1) 平成25年度収入・支出の状況

(平成25年度決算書より抜粋)

(単位：円)

	科 目	決 算
経常収益	検査手数料	53,723,243
	その他	7,999,566
	計	61,722,809
経常費用	検査事業費	50,955,168
	広報啓発事業費	733,455
	その他	1,618,304
	計	53,306,927
経 常 増 減 額		8,415,882

## 2) 活動状況の概要

- (1) 第58～61回理事会・第4～第7回評議員会を開催し、公益財団法人として公益性を拡大するための取り組みについて協議した。
- (2) 「食鳥だよりNo28」を編集し、各処理場、関係機関等に配布して食鳥検査事業の普及・啓発を行った。
- (3) 平成24年度に作成した協会創立20周年記念誌を増刷し、関係機関に配本して食鳥検査事業の普及・啓発を行った。
- (4) 各処理場において、疾病診断技術及び高病原性鳥インフルエンザに関する研修会を開催し技能の向上や、正しい知識の普及・啓発を図った。

## 3) 平成25年度精密検査状況 (3処理場合計)

平成26年3月31日現在

診 断 名	検体数	検 査 件 数				平成24年度
		細菌検査	組織検査	理化学検査	合 計	
マレック病	0	0	0	0	0	0
サルモネラ症	0	0	0	0	0	0
大腸菌症	82	82	0	0	82	79
敗血症	7	7	0	0	7	0
変性	0	0	0	0	0	0
出血	0	0	0	0	0	0
炎症	0	0	0	0	0	0
腫瘍	0	0	0	0	0	0
その他	0	0	0	0	0	0
合 計	89	89	0	0	89	79

# (公財)鳥取県食鳥肉衛生協会人事

## 協会役員

(平成26年4月1日現在)

評議員長	浜本詩馬	評議員	前坂英雄
評議員	望月進	評議員	河本順子
評議員	竹本佐代子		

(平成26年5月15日現在)

理事長	南三郎	副理事長	松島文子
常務理事	遠藤毅	理事	大槻公一
理事	小畑正一	理事	山田恭子
理事	徳吉公司		
監事	小坪正一	監事	宮石憲士

## 協会職員 (平成26年4月1日現在)

事務局長(兼任)	遠藤毅	書記	黒田直子
総括班長	井田穂積	検査専門員	田倉恭一
名和班長	加川清三郎	検査専門員	齊尾秀隆
淀江班長	山中哲雄	検査専門員	高濱伸嗣

## 表紙の写真

### 米久おいしい鶏の西山鶏舎全景

撮影場所：東伯郡琴浦町三保

写真提供：米久おいしい鶏株式会社

平成25年4月に、米久おいしい鶏株式会社が琴浦町に造成した、西山団地の鶏舎の全景です。年間100万羽の生産が可能な、大型プロイラー団地です。

## 特集

### 役員合同研修会報告

当協会の役員研修会として、当協会の大槻理事に、鳥インフルエンザの最近の知見についてお話を頂きました。人から人への感染、弱毒ウイルスが強毒株に変化する可能性等、警戒の必要性を認識させられました。

## 編集後記

骨抜き鶏肉関税は、11.9%と比較的低率ですが、TPP交渉次第では更に低率となり加工用肉の輸入増が懸念されます。鶏肉自給率は、70%の高率を誇り安泰ともとれますが、生産コストの低減、衛生管理の徹底や規模拡大等で難局を乗り越えて頂きたいものです。

## 食鳥検査だより No.29

(平成26年7月1日発行)

公益財団法人 鳥取県食鳥肉衛生協会  
〒689-3203

鳥取県西伯郡大山町小竹1291-7

TEL 0859-54-4133

FAX 0859-54-4137

Eメールアドレス shc@orange.ocn.ne.jp

ホームページ <http://www6.ocn.ne.jp/~toriken/>